《書　　評》

『水滸伝』第十一冊（岩波文庫・清水　茂訳）を評す

鈴　木　陽　一

1.　読者の一人として

戦後間もなく『水滸伝』の第一冊が岩波文庫から出版された。昭和 22 年のことである。中国の白話文学の研究書も工具書も乏しい状況のもとでのことである。それは吉川幸次郎氏を中心に行なわれていた元曲の研究のいわば副産物であったが，極めて大きな意味のある翻訳であった。戦後の日本における白話小説の研究史上欠くことのできぬ存在であると言ってよい。

しかし，残念なことに順調に刊行されたのは第五冊まで，以後は遅々として進まず 36 年後の今日に至るもなお完結していない。読みかけの小説の続きを待たされること数年間，しかもそれが一度や二度ではないとあっては読者たるものたまったものではない。しかも筆者の知る限り，1960 年代には工具書も研究も大幅に進歩したのである。にもかかわらず，一冊の刊行に 5 年も費すのは，よし翻訳に完璧を期したにせよ，怠慢のそしりは免れ得ないのではないか。このままでいけば，第一冊刊行当時の若者は最終冊の刊行時には還暦を迎えることになるのである。これはいかなる理由があろうとも読者無視の行為と言わざるを得ない。筆者も読者の一人として，訳者清水茂氏，並びに岩波書店に対して，かかる事態を反省し一刻も早く最終冊まで刊行されんことを強く望むものである。

2.　中国語は分らなくとも誤訳は分る

『水滸伝』が翻訳されて喜ぶのは一般の文学愛好者に限らない。中国文学の研究者，とりわけ浅学の筆者にとっては，教わるところ極めて多く，研究を進める上でも大変に有難い存在である。しかし，全く意外なことに，今回刊行された『水滸伝』第十一冊は諸手を挙げて歓迎することので

きない翻訳であった。筆者がこの翻訳に些か問題ありと気づいたのは以下の様な奇妙な日本語に出会ったためである。なお，各行の頭の数字は訳文の頁数を示し，傍点は全て引用者による。

18 罪とがは空いっぱいなのに
55 行儀よくいながれ
77 まるく問くばり，
103 よくも天朝さまの軍隊に手むかう気か。
116 二ひきの馬は，水を踏んで立ち上がります。
140 さらに高大将の腹心です。
148 みるみる日は次第に暮れ
180 ほんのわずかなちょっぴりしたもの，
180 みずうみに落ちさすらっているのね。
219 きみたち，みなのもの，

以上のような首をかしげたくなる表現があちこちに見える。そこで筆者が原文と照し合わせてみると，更に多くの悪訳・誤訳を見出す結果となってしまったのである。

3. 中国語を知らないと分らない

翻訳をする際に，意訳か直訳かが問題になる。しかし実際にはどちらも必要なものである。原文の構造や細部の意味までをも伝えようとすれば直訳をしなければならないし，かといって直訳だけでは日本語にならなくなってしまう。直訳をして注釈で補うという方法もないではないが，これにも限度はある。特に『水滸伝』のような小説の場合，余りに注釈があるとそれだけで読者の興味は著しくそがれてしまう。従ってまず日本語の類似の表現に置き換え，必要な場合注釈で補うというのが望ましい。ところが，今回の『水滸伝』はまさに直訳，しかも注釈抜きの表現が随処に見られる。以下，原文，訳文，筆者の解釈の順に示す。なお原文の上の数字は回数を表す。

75 不成全好事，也不愁你這伙賊飛上天去了。

14　めでたく納まらなくても，まさかきさまらどろぼうども，天へ飛び上がるわけでもあるまい。

○　ここは直訳であり，かつ誤訳である。原文は「天へ飛んでいってしまう」の意。「～上～去」は「飛」という動作の方向を表すにすぎない。そもそも日本語では「とびあがる」と言えば驚き，「天にも上る」と言えば喜びの表現であり，この文脈とは全く一致しない。

75　罪悪迷天

18　罪とがは空いっぱいなのに

○　「迷天」は「弥天」とも書く。非常に大きな，という比喩的表現として頻般に用いられる。

75　把水酒做御酒哄俺們吃

21　水酒を恩賜の酒だと，おれたちをだまして飲ます気か。

○　「水酒」とは水っぽい酒のこと。

76　宋江与呉用已自鉄桶般商量下計策。

34　宋江と呉用，もうちゃんと鉄の桶のように相談して計略をきめ，

○　「鉄桶般」とは計画に一分のスキもないこと。しかもこの訳文では，「鉄の桶のように相談して」と読めるから，おそらく一般の読者には皆目分らないであろう。

77　童貫攏馬上坡看時，四面八方，四隊軍馬，両脇両隊歩軍，栲栳圈，簸箕掌，梁山泊軍馬大処斉斉殺来。

74　童貫馬をまとめて坂をのぼり眺めやれば，四方八方，四隊の軍勢，両わきは二隊の歩兵，籠の中か，箕の底か，梁山泊の軍勢は，あちこちからひしひしと押し寄せて来ます。

○　「栲栳圈」，「簸箕掌」は，共にまるくしかもきっちり並んでいる形容として用いられる。従ってここでは梁山泊の軍勢が童貫たちを取り囲んでいる様と考えればよい。なお，『水滸伝』の第20回に，「簸箕掌栲栳圈坐定」という文があり，訳では，「車座に掛け

ます。」としている。これなら十分に理解できる。また，「攏馬」を「馬をまとめて」と訳しているのも誤解されやすい。「馬をたてなおし」と訳すべきであろう。

79　八箇馬蹄翻盞撒鈸相似，約赶過五七里，
114　八つの馬のひづめ，さかずきを伏せ鐃鈸をまいたように，五六里も追いかけ，
○　ここは逃げる呼延灼を韓存保が追いかける場面。「翻盞撒鈸」は前後の関係からして馬の疾駆する様であることは容易に分るのではないか。要するにひずめの激しく動く様であることが分る日本語にすべきである。

79　張清軽舒猿臂，欸扭狼腰，
117　張清，軽くひじを伸ばし，狼のような腰をひねれば，
○　原文を見れば「猿臂」と「狼腰」とが対になっているのは一目瞭然である。それを片方だけ直訳したから，不思議な日本語になってしまったのである。「さっと腕を伸ばし，腰を鋭くひねり」と訳するのが妥当であろうと思う。

80　只見一箇人従水底下鑽将起来，便跳上柁楼来，
158　ひとりの男，水底からもぐり出て，舵やぐらの上に跳びあがり，
○　ここは直訳と言うより誤訳とすべきかもしれない。「鑽」とは本来，錐で穴をあけることを言い，転義として用いられる場合も，その意味が生きている。水から勢いよくとび出して来ることを，穴をあけるような動作に見たてて，「鑽」を用いているのである。「水底からもぐり出て」では，水底に秘密の抜け穴でもあるようではないか。

4.　誤訳と悪訳

以下，冒頭から順序通りに誤訳，及至は悪訳と思われるものを挙げていこう。

9　拙者，天子さまに奏上して，大軍を動員し，みずからかの地へ行って，根こそぎひっこ抜くのこそ，それがしの願い。大将閣下のこのたびのご旅行，それがしの部下なる副官一名，弁舌の達者で，一を聞けば十を答える。

○　この文をよく読んで頂きたい。前半は「拙者」と「それがし」が重複し，後半は明らかに言葉が不足している。

12　五色の絹織物表裏二枚，

○　表裏は原文でも「表裏」，ところで日本語で「表裏」とは如何なる意味か。

33　はるばる進軍すること，一，二日ならずして，早くも済州ざかいまで着きました。

○　「はるばる」は原文は「迤逗」，軍隊の隊列が長々と続く様。

34　命あっての物だねと死ぬのをこわがり，

○　これは直訳から生じた悪訳である。「命あっての物だね」だけでなくてはいけない。

35　山のうしろから，……早くもまろび出た五百の歩兵，

○　「まろび出た」の原文は「転出」で，完全な誤訳。物かげから出てくる意味であって，五百の歩兵がころがり出てくる訳がない。なお，「転出」は頻出するが，他の個所では「めぐり出る」と正しい訳をしている。

56　参謀総長童貫……梁山泊の軍勢を見てあれば，……この九宮八卦の陣立てを作りあげました。軍勢，人なみすぐれ，将兵，雄雄しくとも，驚きのあまりたましいは飛び散り，……

○　この文だけを読むと，「人なみすぐれ」た軍勢（これも妙な表現だ）と「雄雄しい将兵」は童貫の側のように思えるが，原文はそうではない。九宮八卦に陣立てた梁山泊の軍勢の見事さに童貫が驚いているのである。

62 思うに，このいなかどろぼう，ただ山をたよりにのさばって，たくさん軍勢をそなえ，からいばりをしているだけなのに，一時，地の利を失なったまでのこと。

○ この文の誤りは，「地の利を失なった」まで一つのセンテンスにしてしまったことである。「地の利を失なった」のは官軍であって，「いなかどろぼう」ではない。

65 かのりょう師，……さおを手もとにとって，舟に近づくものを，一打ち一人，眉間を打つもの，あたまを打つもの，顔を打つもの，みな水中に打ち落としてしまいました。

○ 「もの」を乱用しているため，訳の分らない文になっている。後半三つの「もの」は「やら」に改めるだけでいい。

76 馬は後の脚を折ってしまい，李明を馬から振り落とせば，手にした槍を投げ棄てて，逃げ出そうとします。

○ 「後脚をやられた馬は李明を振り落とします。李明，手の槍を投げ棄てて逃げ出そうとします。」と訳せばよい。

83 童貫をやっつけて，胆をひやし心くじけ，夢の中でもこわがるほど。

77 殺得童貫胆寒心碎，夢裏也怕。

○ 「童貫が胆を冷し心くじけ，夢でも怖れるほどやっつけた。」と訳すべき。

103 槍をあわせて勝負すれば，なにかまちがいあってそち一代の清き名声をむざむざ失なおうぞ。

○ 「槍をあわせ（槍をあわすとは勝負することに決っている!）なにかまちがいあれば」とすべきである。

105 荆忠，一ふりの大長刀を使い，……二人の将軍，手合わせして，二十合ばかり戦いましたが，呼延灼がさそいのすきを見せたのに，大刀を受け止められ，手順に振りあげた鋼の鞭のただのひと

打ち，ねらいあやまたず，みごと荆忠のあたまにあたれば，……

○　この文を読んで，人の動作がすんなりと想像できるであろうか。主語と述語の関係，能動と受動の使い分けに無頓着なため，こういう悪文ができ上る。

120　おだやかなことばを用いないで，利害ばかりを話した……

79　不用嘉言，専説利害，

○　「利害」イコール「利害」ではない。ひどい，の意味である。初歩的誤訳。

125　この梁山泊のみずうみの水面は，やっつけられて屍はいたるところに横たわり，

○　83 の例と全く同類の誤りである。「屍がいたるところに横たわるほどやっつけた」と訳すべきである。

128　この一句は，あいまいないいかた，

79　這一句是囫圇（一作「侖」）話。

○　囫圇 (húlún) はまるごと，の意味。つまり切れ目のない一つの文である，ということを述べているのだ。

143　船橋からひとこえ拍子木を打てば，

○　日本語では，生物の出す音を「声」と言い，無生物の場合「音」と言う。ところが中国語ではどちらも「声」，「声音」でよい。つまり，ここは直訳して誤訳になった例である。

154　前の二回は，いずれも適当な人を得なかったので，軍勢を失ない，たくさんの船をやっつけられるめにあった。今度は，よい船をいくらか造ったのだから，わしがもしじきじき出かけて監督せねば，どうしてこの敵をつかまえられよう。

○　こういう日本語の初歩的ミスを指摘せねばならないことを，私は残念に思う。言うまでもなく，「造ったのだから」ではなく，「造ったものの」としなくてはならない。

165 大将閣下は，おえら方のおことば，信頼をうら切ることはありますまい。

80 太尉乃大貴人之言，焉肯失信

○ 原文は「太尉」と「大貴人」が並列，しかし訳文の方は「太将閣下」と「おえら方のことば」が並列になってしまっている。また「焉肯……」は「ありますまい」などといった弱い反語ではない。

175 一日ならずして

81 不則一日

○ 原文は，何日もかけて，の意。

178 あたしは年が小さいんだから，

81 俺年紀幼小，

○ この台詞の人物は 27 才である。ここも直訳から出た誤訳。

5. おわりに

私は清水氏の揚げ足を取ろうとするものではない。また小説の翻訳がどれ程困難であるかということも，完璧を期すことが不可能に近いことも知っているつもりである。そうしたことを割引いて考えたとしても，また第十冊までの訳文と比べても，明らかに今回の第十一冊は杜撰のそしりは免れ得ないと思う。また人称の用い方のいい加減さ，用語の無神経さも，私には些か目に余るものに思えたこともつけ加えておく。コソ泥あがりの時遷が「ぼく」だの「きみ」だのとは，一体どういう訳だろう。

そもそも，中国の白話小説は翻訳の数が少ない。代表的とされる四大奇書のうち，二種類の完訳が出ているのは『三国志演義』ただ一つである。『西遊記』に至っては，明刊本の完訳は岩波文庫で出版されかけたが，訳者の死去と共に途中でストップしたままである。従って，一つの翻訳が与える影響は極めて大きく，その訳のでき如何が白話小説全体に対する評価を左右しかねない。そうした状況の下で，今回のような安易な翻訳が出版されたことは，白話小説の研究者の末席を汚す私にとって，甚だ遺憾であり，敢えて言えば迷惑である。こんなものが白話小説である，と一般の読者に思われることを私は何よりも怖れる。

紙幅の制限もあって，多数の例を示すことができなかったのは残念である。中国語が分らない方でも，一読すれば，私が指摘した以外にもたくさんの誤訳・悪訳が見つけられることはまちがいないのだから。その意味で，この『水滸伝』第十一冊は，誤訳・悪訳の見本帖として貴重なものかもしれない。